



（東側　えつり穴）



（西側　えつり穴）

写真110 八足門前調査区 宇豆柱 南柱材（加工痕）

4. 出土遺物

柱周辺から出土した遺物のほとんどが破片であり、図化できた遺物は以下のとおりである。

柱上面出土遺物（第72～73図 写真111・113・表16～17）

柱上面の黒色炭化土より出土した遺物である。

1～7は十師質土器である。1は、土師質土器の壺、2～4は土師質土器の皿、5～7は土師質土器の柱状高台付壺である。

8は、弥生土器甕の底部、9は弥生土器の単純口縁の甕である。

10～20は、鉄製品である。鉄製品は、形状のはっきりとわかる鉄製品を選択し、掲載している。

10は、長さ15cm以上の釘である。11は、長さ20cm以上の釘である。10・11とも打面は方形であり、胴部と同じ幅で単純に終わる。

12は、長さ13cm以上の釘で、端部が圧延により、台形となり、頭部と胴部間にくびれがある。

13は、長さ11cm以上の釘で、打面が横に長い台形である。

14は、幅7.3cm、展開長32cmの帯状鉄製品で、両端が折れ曲げており、やや細くなっている。鍔と同じように両端を木材に打ち込み部材同士を連結するためのものと思われる。長さ15cmの鉄釘が鋸びにより鋸着している。

15は、長さ13cm以上の釘である。打面は方形であり、胴部と同じ幅で単純に終わる。

16は、長さ14.7cmではほぼ完形の鉄釘である。

17は、頭部を欠損しているが、胴部が下に向かって広がる形状の釘である。

18～20は小型の鉄釘である。18は、頭部欠損であるが、胴部の一部に赤色顔料が付着している。19は、頭部を折り曲げている。釘の所々に赤色顔料が付着している。20は、長さ8cm程度で、頭部を折り曲げている。

柱穴内出土遺物（第74図 写真112・114・表18

～19）

柱穴内もしくは、柱底部から出土した遺物である。

1～2は、土師質土器の柱状高台付壺である。壺部は欠損しているが、底部回転糸切り痕が明確に残る。

3は、展開長16.3cmの釘である。頭部をやや折り曲げており、胴部から先端にかけて2箇所にねじれるように曲がる。

4・5は、宇豆柱底面から出土した鉄製の新（ちゅうな）と呼ばれる木材の表面調整用の横斧である。4・5とも柄の痕跡は全くなく、柄から外れた状態で刃先だけ埋められたと考えられる。

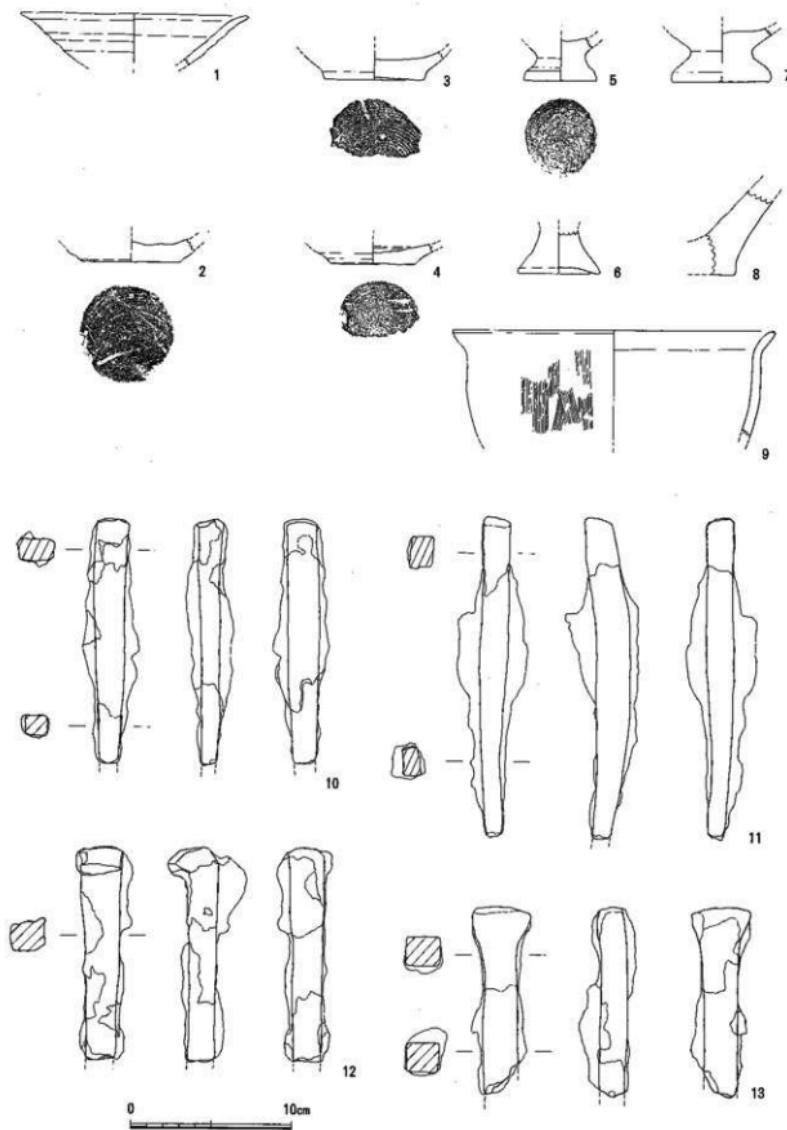
4は、柱底面の堆積土中から、また5は、宇豆柱南柱材直下から出土している。

4は、完形の新である。長さ11.4cm、刃幅7.0cmで、袋部断面6角形である。胴部側面には、一定方向の擦痕が確認できる。分析の結果では、鋸造の可能性が指摘されており、擦痕は鋸造によって生じるバリを削り落としたものと考えられる。

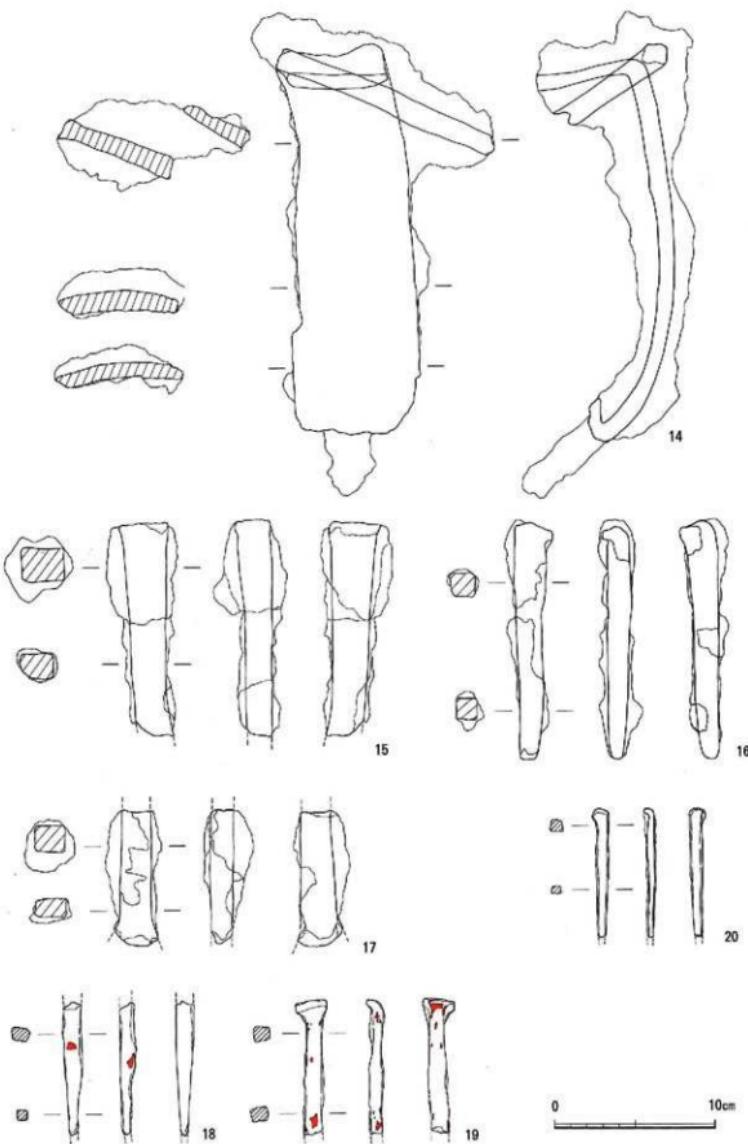
なお、鉄器の分析結果については、第20章の「X線CTによる鉄器の非破壊評価」を参照いただきたい。

5は、完形の新である。長さ12cm、刃幅7.1cmで、袋部断面方形である。袋部は、折り返しによって成形されている。外面及び袋部内部に木質部分があるが、付近に散在する加工木片が二次的に付着したもので、本来の使用状態や埋納状態とは関係ない。

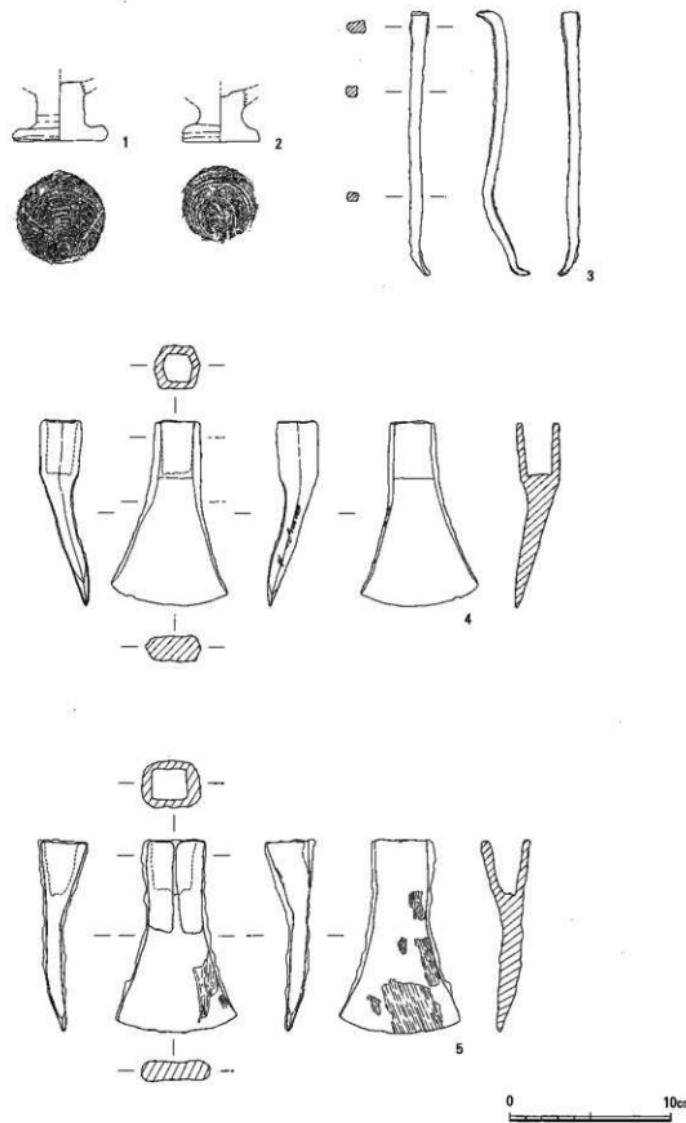
これら2点の新は、柄が抜かれた状態で水平に置かれており、柱立ての儀礼使用されたあとに意図的に埋納されたと考えられる。



第72図 八足門前調査区 宇豆柱上面出土物実測図(1) (S=1/3)



第73図 八足門前調査区 宇豆柱上面出土遺物実測図 (2) (S = 1/3)



第74図 八足門前調査区 宇豆柱柱穴内出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

表16 八足門前調査区 宇豆柱上面 出土遺物(土器)観察表(番号は第72図と対応)

番号	層位	種類	直径(cm)	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	残存率	色調	形状	調査/形態/文様	備考
1	宇豆柱上面	土質質土器	直	14	—	—	11	灰黃褐色	やや粗	内外面:油転ナメ	—
2	宇豆柱上面	土質質土器	直	—	—	6	底部のみ	淡褐色	粗	底部:円弧系切り 内外面:凹輪ナメ	磨耗が著しい
3	宇豆柱上面	土質質土器	直	—	—	6	全体の90	にぶい黄褐色	直	底部:凹輪系切り 内外面:凹輪ナメ	—
4	宇豆柱上面	土質質土器	直	—	—	5.2	全体の90	灰黃褐色	やや粗	底部:凹輪系切り 内外面:凹輪ナメ	—
5	宇豆柱上面	土質質土器	柱状高台付环	—	—	4.4	全体の50	淡褐色	やや粗	底部:凹輪系切り 环等内部:凹輪系カケヅリ 外側:凹輪ナメ	—
6	宇豆柱上面	土質質土器	柱状高台付环	—	—	5	全体の30	にぶい褐色	やや粗	—	磨耗が著しい
7	宇豆柱上面	土質質土器	柱状高台付环	—	—	6	全体の60	淡褐色	やや粗	—	磨耗が著しい
8	宇豆柱上面	陶土器	直	—	—	—	底部小片	(外側)にぶい褐色 (内側)灰褐色	やや粗、1回程度の削刮を多く含む	底部:凹輪系 内側:油転ナメ 外側:油転のラッカギザリ	—
9	宇豆柱上面	陶土器	直	20	—	—	小片	淡褐色	やや粗、1回程度の削刮を多く含む	底部:口部外周:油転ナメ 内側:油転ナメ、油カケ 外側:油転ナメ	—

表17 八足門前調査区 宇豆柱上面 出土遺物(鉄製品)観察表(番号は第72・73図と対応)

番号	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	生存率(%)	備考
10	宇豆柱上面	釘	15.3	通幅幅2.0×1.7	通幅幅に同じ	140.21	80	打面:方形/底部:底部と同じ組で早時に終わる
11	宇豆柱上面	釘	20	通幅幅1.5×2.0	通幅幅に同じ	242.51	80	打面:方形/底部:底部と同じ組で早時に終わる
12	宇豆柱上面	釘	13.2	頭部幅3.2×3.0	2.2×1.9	171.02	50	打面:台形/底形/底部圧延、折り曲げ、崩壊との境にくびれあり
13	宇豆柱上面	釘	11.7	頭部幅3.6×1.4	2.2×1.9	181.08	50	打面:棒に広い舟形/崩壊; 邊部丸削、折り曲げて崩壊に沿わず
14	宇豆柱上面	端状金具	32.0	7.3	1	829.56	80	崩壊を折り曲げる
15	宇豆柱上面	釘	15.3	通幅幅3.5×1.8	2.6×2.0	207.56	80	打面:棒円形?/?底部:端部圧延、折り曲げて崩壊に沿わす? (崩壊より自然とせず)
16	宇豆柱上面	釘	14.7	通幅幅2.4×2.0	1.9×1.4	66.17	100	打面:方形/底部:底部折り曲げ、崩壊との境にくびれなし/不貫
17	宇豆柱上面	釘	8.8	頭部欠	1.9×1.7	87.86	30	本貫付
18	宇豆柱上面	釘	8.3	頭部欠	1.1×0.8	10.65	80	一基赤色斜斜付
19	宇豆柱上面	釘	8.4	頭部幅2.0×火	1.0×0.8	27.32	50	打面:方形?/?底部:端部圧延、折り曲げ(頭部を欠く)、崩壊との境にくびれなし/全面に赤色斜斜付
20	宇豆柱上面	釘	8	頭部幅1.1×0.8	0.8×0.8	9.19	90	打面:方形/底部:底部折り曲げ、崩壊との境にくびれなし

表18 八足門前調査区 宇豆柱柱穴内 出土遺物(土器)観察表(番号は第74図と対応)

番号	層位	種類	器種	口径(cm)	断面(cm)	底径(cm)	残存率	色調	形状	調査/形態/文様	備考
1	宇豆柱柱下	土質質土器	柱状高台付环	—	—	5.6	全体の60	淡褐色	直	底部:凹輪系切り 内側:中央に穿孔 外側:凹輪ナメ	—
2	宇豆柱柱下	土質質土器	柱状高台付环	—	—	4.9	全体の50	淡褐色	直	底部:凹輪系切り 内側:中央に穿孔ナメ 外側:凹輪ナメ	—

表19 八足門前調査区 宇豆柱柱穴内 出土遺物(鉄製品)観察表(番号は第74図と対応)

番号	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	生存率(%)	備考
3	宇豆柱柱下	釘	鋼板幅16.3	通幅幅1.1×1.1	0.8×0.8	45.87	100	打面:方形/頭部:端部圧延、軽く曲げる、底部との境にくびれなし/頭部下半/底部同じであるよう上部から
4	宇豆柱柱下	釘	11.4	刃幅7.0	袋刃幅2.8×2.8 (内幅1.8×1.6)	311.04	100	底部断面八角形/底部側面に一定方向の削刮あり
5	宇豆柱柱下	釘	12	刃幅7.4	袋刃幅4.1×2.9 (内幅2.2×2.0)	255.54	100	底部断面八角形/底部折り返し/外側及び底部内部に本貫部分あり

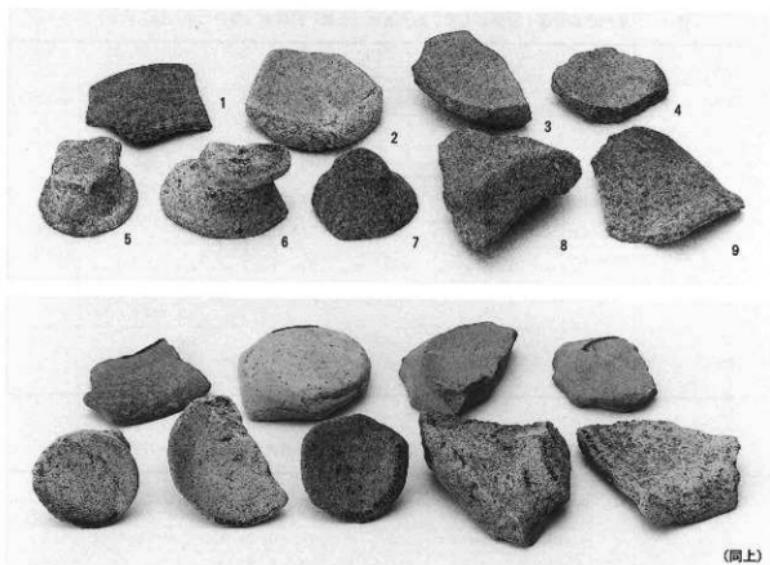


写真111 八足門前調査区 宇豆柱 上面 土器 (番号は第72図と対応)

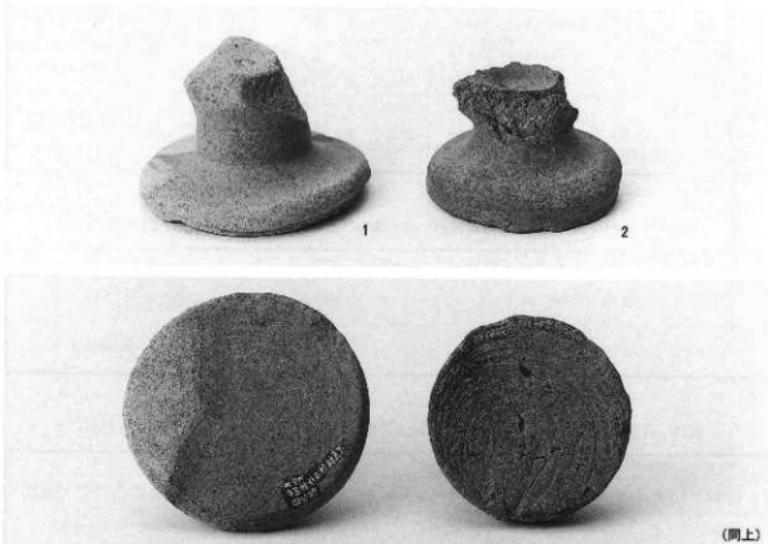


写真112 八足門前調査区 宇豆柱 底面 土器 (番号は第74図と対応)

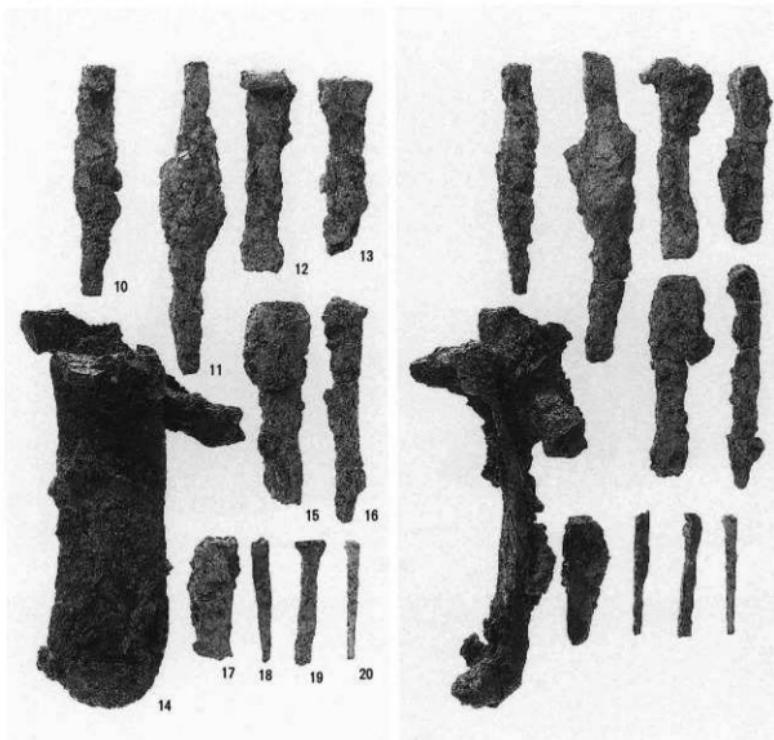


写真113 八足門前調査区 宇豆柱 上面 鉄製品 (番号は第72~73図と対応)

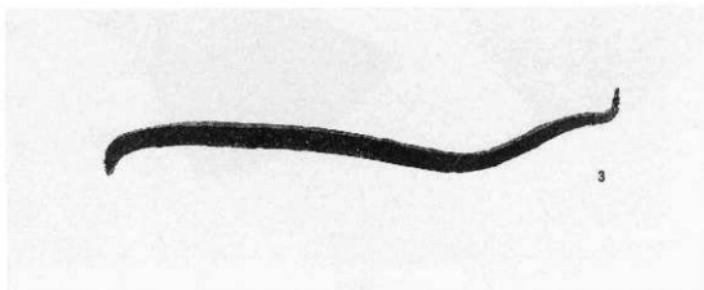
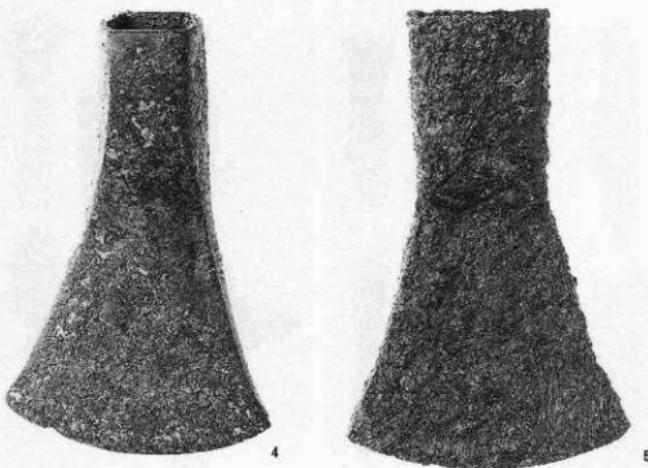


写真114 八足門前調査区 宇豆柱 底面 鉄製品 (番号は第74図と対応)



(表面)



(裏面)

写真115 八足門前調査区 宇豆柱 底面 新（1）（番号は第74図と対応）

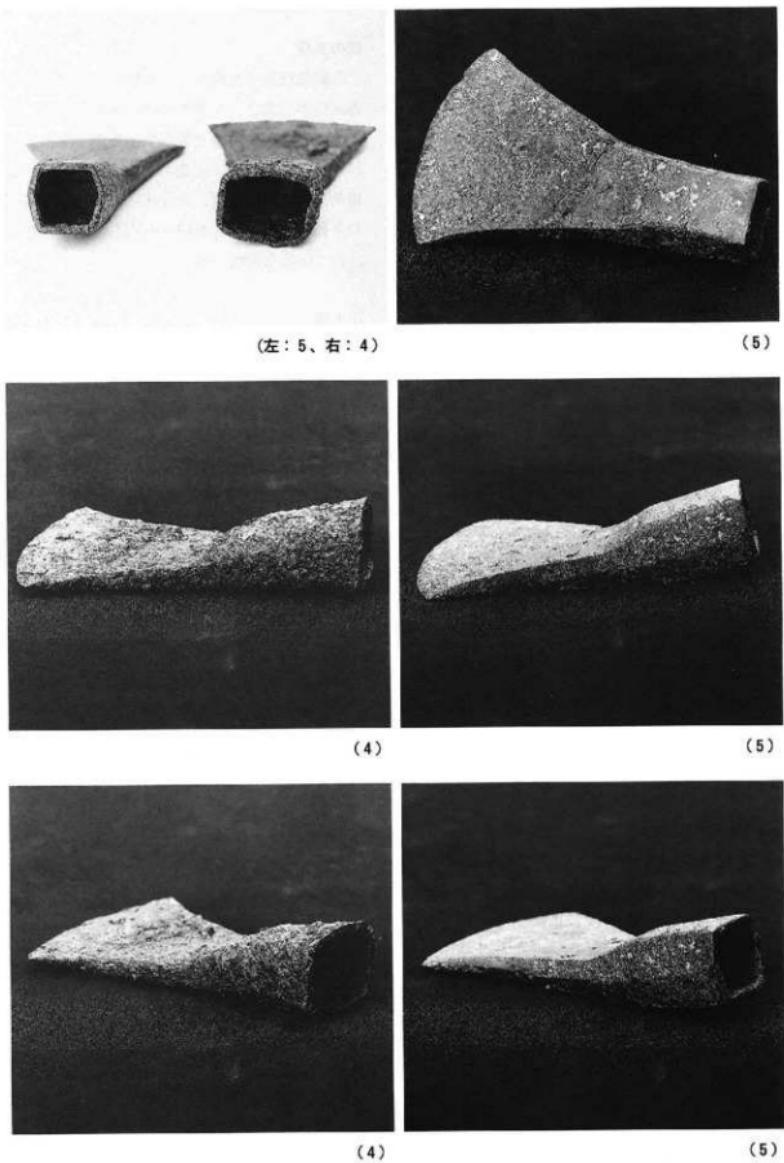


写真116 八足門前調査区 宇豆柱 底面 新 (2) (番号は第74図と対応)

第4節 心御柱の調査

1. 調査の方法

心御柱は、平成12年度拡張調査により柱の上面を確認していた。平成13年度調査は、柱穴を掘り下げる、柱穴および柱の構造、時期の確定、祭祀行為などの有無を目的とした調査である。平成13年7月から柱周辺の礫を面的に掘り下げを開始した。柱周辺の礫の重量・石種・出土位置を記録しながら掘り下げを行なった。9月には柱を完全に検出した後、柱の取り上げを行なった。その後、柱穴下部を調査し、平成14年2月にはすべてを埋め戻して調査を終了した。

2. 柱穴の検出面

柱穴の検出面は、標高7.4m前後であり、宇豆柱とほぼ同一のレベルである。これは、巨大本殿廃絶直後に本殿付近を平滑に削平した結果であろう。

3. 柱穴の構造

規模

柱穴については、上面検出の段階では、宇豆柱・南東側柱と同様に南方方向にとがった倒卵形を想定していた。しかしながら、掘り下げるにしたがって、調査区内で遺構が切りあっていることが判明した。遺構の切り合い関係については、後述する。

心御柱の柱穴として確認した部分は、平面形は、北西・南東間で4.0m、北東・南東間で3.5mを測る、南東方向にとがった倒卵形が想定される。

柱材は、北側に1本（北柱材）南側に2本（南東・南西柱材）の3本の柱材が互いに隙間なく接しており、3本を結束して1本の巨大な柱をなしている。3本を結束した柱の直径は、約2.70mである。

南西柱材の直下には、板材が出上しているが、基本的には掘立て柱の柱穴であると考えられる。

礫の充填

心御柱柱穴を充填していた礫については、調査区内から出土した礫を面的に掘り下げた。柱穴内の石は、宇豆柱と同様で、角礫から亜円礫が用いられている。出雲大社周辺の礫分析（第19章参照）によれば、出雲大社の北側の素鷲川や吉野川周辺の岩石が川に転石したものが使用されている可能性が高い。

柱上面

宇豆柱・南東側柱と同様に柱材の直上には、青灰色の粘質土が堆積していた。さらに上面には、厚さ20cm前後の炭化物を多量に含む焼土層が確認された。焼土は、柱の直上に限られ、礫間などには焼土・炭化物は含まない。上面出土遺物の詳細については後述する。

赤色顔料

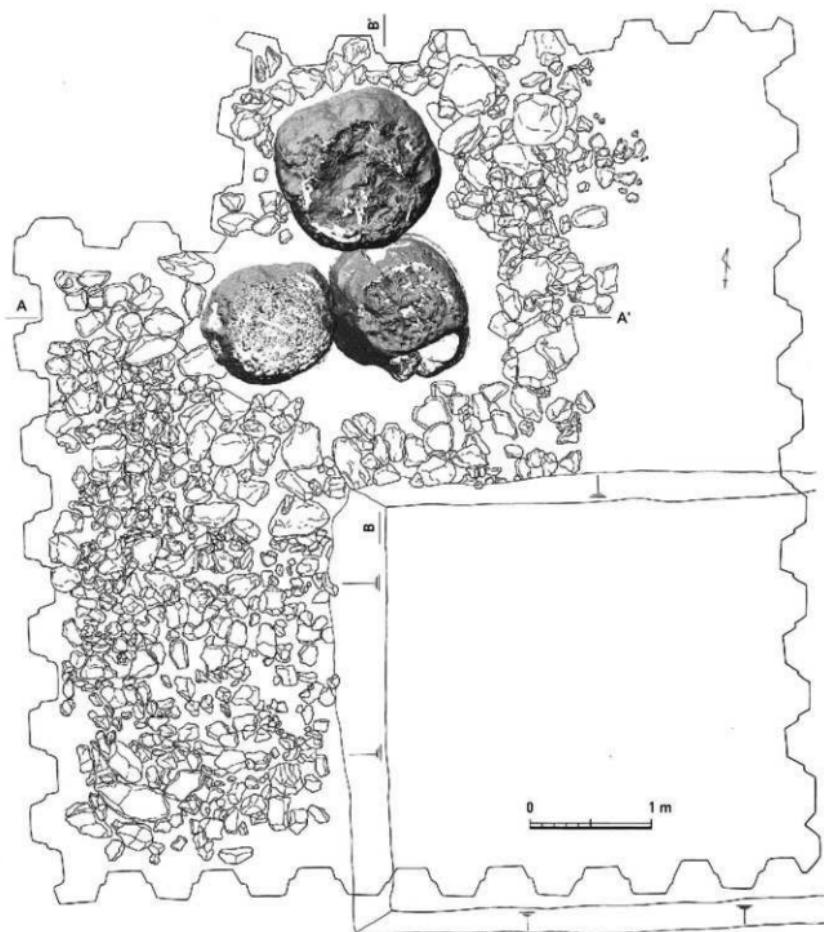
心御柱自体に赤色顔料が付着した部分はないが、柱直上に堆積した焼土中から出土した鉄製の釘（第88図・写真146）には、打面・先端部に赤色顔料が付着していたほか、柱周辺の青灰色粘質土からも出土している。

柱の立ち方

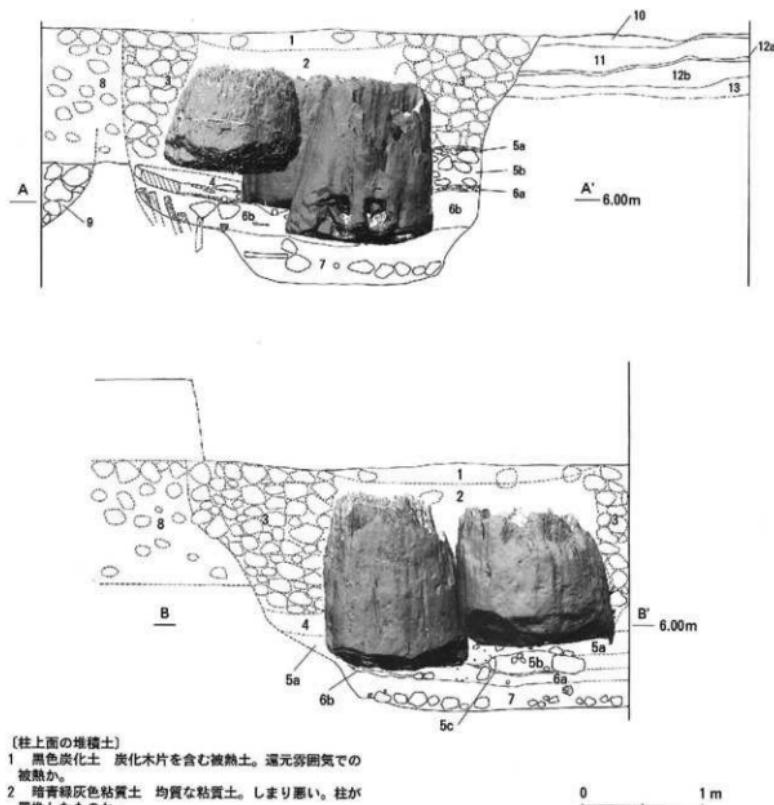
表面観察では、大きく傾いた様子ではなく、転倒したと考えられる証拠はない。

宇豆柱にみられるようなスロープは確認していないため、厳密な柱立ての方向は不明であるが、南東方向にとがった倒卵形が想定されることから、北西方向から南東方向に向かって柱立てが行なわれたと考えられる。

柱材の立て方の順序としては、柱の埋め込まれた深さの差異から南東柱材→北柱材→南西柱材の順序が考えられる。



第75図 八足門前調査区 心御柱出土状況平面図 (S = 1/40)



〔柱上面の堆積土〕

- 1 黒色炭化土 炭化木片を含む被熱土。還元雰囲気での被熱か。
- 2 暗青緑灰色粘質土 均質な粘質土。しまり悪い。柱が置換したものか。
〔柱底面の堆積土〕
- 3 青灰色礫混粘質土 0.1kg~94kgの角礫・亜円礫を主体とする。礫間にはきめの細かい青灰色粘質土が入る。
〔柱底面の堆積土〕
- 4 暗茶色粘質土 木片を多く含み、分解途上の有機物が主体となる土壌。南西柱材柱立て時の堆積物か。
- 5a 暗茶色土 木の葉・木片の集中堆積層。北柱材柱立て時の堆積物か。
- 5b 暗茶色粘質土 木片を多く含み、分解途上の有機物が主体となる土壌。北柱材柱立て時の堆積物か。
- 5c 暗青色砂混粘質土 穢を含み、粒度は粗い。柱立て作業時に持ち込まれた土か。
- 6a 暗茶色土 木の葉・木片の集中堆積層。南東柱材柱立て時の堆積物か。
- 6b 暗茶色粘質土 有機物多く含む。分解途上の有機物が主体となる土壌。やわらかく、粒子細かい。南東柱材柱立て時の堆積物か。
- 7 暗青灰色砂混粘質土 粒子粗く、じゃりじゃりする。木片・木材を含む。

〔柱穴構築以前の埋土〕

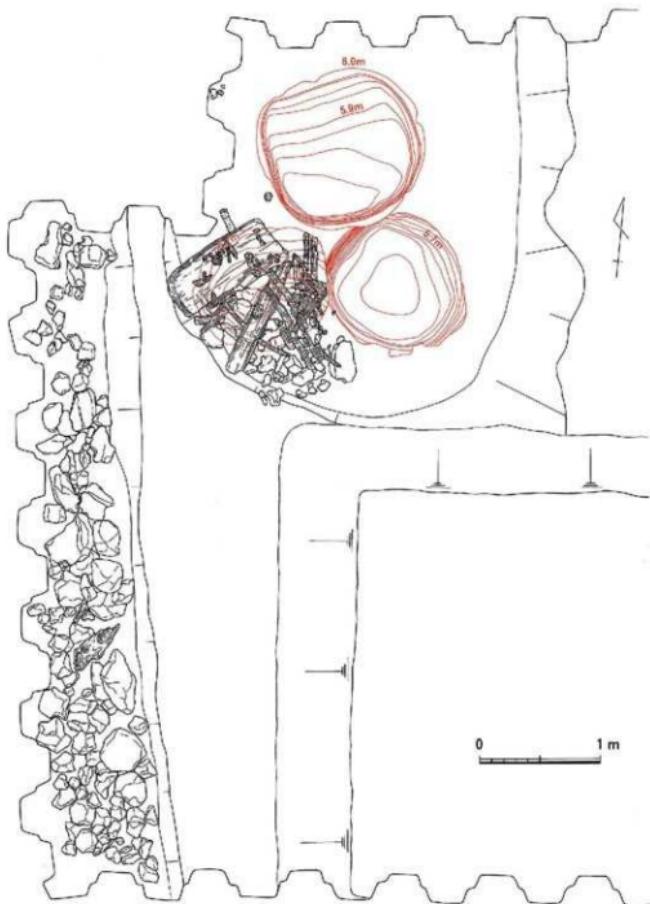
- 8 青灰色礫混粘質土 角礫・亜円礫を多量に含む。礫間にはきめの細かい青灰色粘質土が入る。
- 9 青灰色礫混粘質土 角礫・亜円礫を主体とする。礫間にはきめの細かい青灰色粘質土が入る。
- 10 黒茶色土 硬い粒子がほろほろとしている。マンガンの堆積か。
- 11 淡青色粘質土 きめの細かい粘質土で非常にしまりあり。
- 12a 暗茶色土 水透過度の境界が変色して、暗茶色に変化した土。
- 12b 暗褐色砂混土 粒度は2~5mmにそろっている。やや粒子は粗い。
- 13 黒茶色粘質土 1N区の7世紀初?の包含層に対応する土層か。

第76図 八足門前調査区 心御柱 土層図 (S=1/40)

柱穴下部

柱直下の堆積した土中には、太さ5~10cmの棒材が出土している。(第77~78図)樹種鑑定の結果では、スギ、サカキ、シイノキ属、クスノキ属、クリ、モミ属、マツ属、クスノキ属、

コナラ属と多種の木材が使用されており、意図的に樹種を選択したとは考えにくい(第18章参照)。これらの棒材は、杭のように使用されたわけではなく、柱の直下に敷くような形で出土している。土中からはほかに木の葉も多量に出

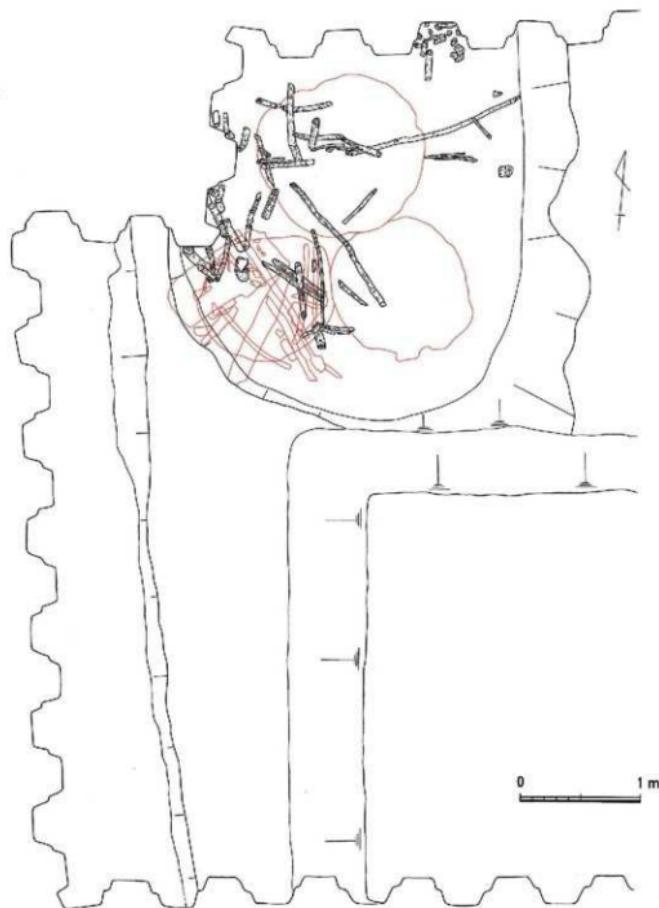


第77図 八足門前調査区 心御柱 底面平面図 (S=1/40)

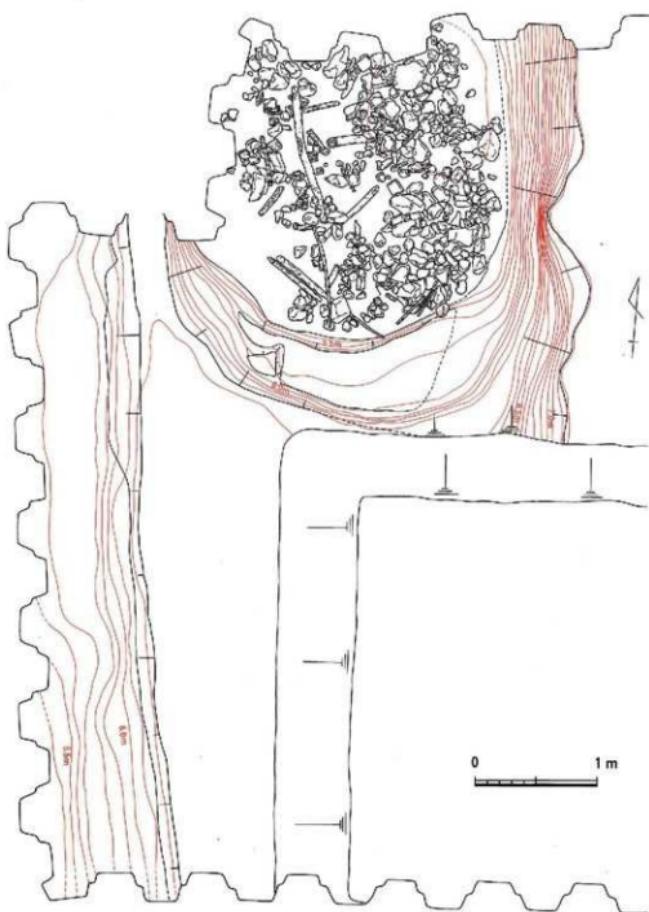
土しており、何らかの意図で、葉の付いた枝を敷いたようである。

柱掘り方の最下面（第79図）には、10cm～30cm大の礫が面的に出土している。南西部はその後の柱立てによって搅乱をうけている。本来は、

柱穴底面に水平にしかれていたものと推測する。これらの礫の性格については、祭祀的行為、もしくは、柱穴構築時に由来するものと考えられる。



第78図 八足門前調査区 心御柱 底面平面図 (S=1/40)



第79図 八足門前調査区 心御柱 底面平面図 ($S = 1/40$)

4. 調査における面について(第80~82図)

心御柱調査区においては、調査区内の掘り下げは、任意的な面を設定して掘り下げをおこなった。各面の遺構の状況は、第81図にて重量別、第82図にて疊の石材ごとに分類し、マッピングした。

第1面

心御柱の上面を検出した面である。標高は7.3m前後である。調査区全体で疊が確認できる。心御柱の掘り方のラインは確認できなかった。

石材は、安山岩が多くみうけられるが、全体的な傾向である。重量では、60kg以上の疊が2点含まれているなど、柱穴部分のほうが、比較的重い石が用いられている。

第2面

上面から約30cm掘り下げた段階で、標高は7.0m前後である。この段階でも心御柱の掘り方のラインは確認できない。調査区全体で疊が確認できる。石材は、安山岩が多い。重量では、60kg以上の疊が2点含まれているなど、柱穴部分のほうが、比較的重い石が用いられている。

第3面

上面から約50cm掘り下げた段階で、標高は6.8m前後である。この段階から、調査区南側では、疊間が空き、まばらになり、心御柱の掘り方の形状が明確になる。石材・重量は、第2面の状況と変わらない。

第4面

上面から約60cm掘り下げた段階で、標高は6.7m前後である。心御柱の掘り方の形状がさらに明確となり、調査区南側の疊はまばらとなる。石材に変わりはないが、重量は50kg未満の疊になる。

第5面

上面から約80cm掘り下げた段階で、標高は6.5m前後である。石材に変わりはないが、重量は40kg未満となる。南側の疊はまばらである。

第6面

上面から約90cm掘り下げた段階で、標高は、6.4m前後である。石材・重量とも、第5面の状況と変わらない。調査区西側に疊がかたよりつつある。

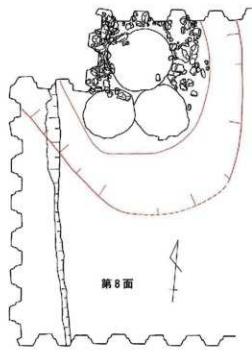
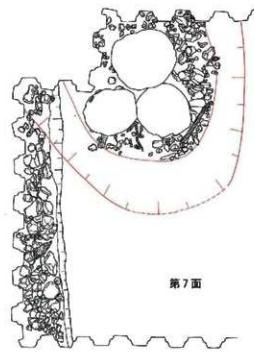
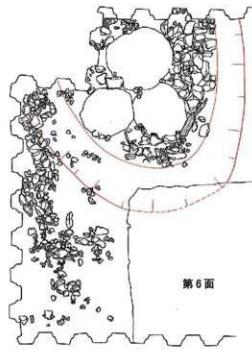
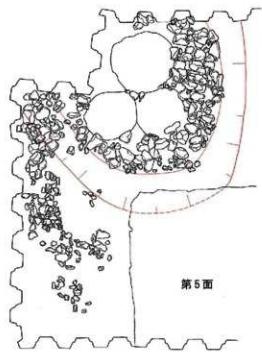
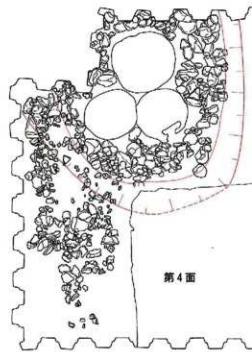
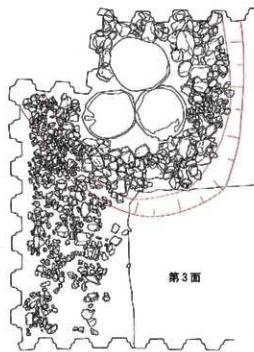
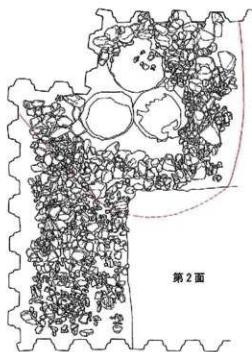
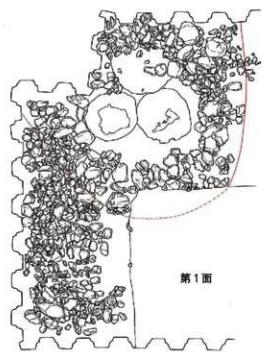
第7面

上面から約100cm掘り下げた段階で、標高は6.3m前後である。石材・重量に変わりなし。調査区西側で、南北の溝状遺構が明確になる。溝状遺構と心御柱の柱穴との切り合い関係は、調査区内では遺構が接近しているが、切り合い関係は確認できない。おそらく、調査区外、北側では溝状遺構を心御柱遺構が切って構築されていると推測される。

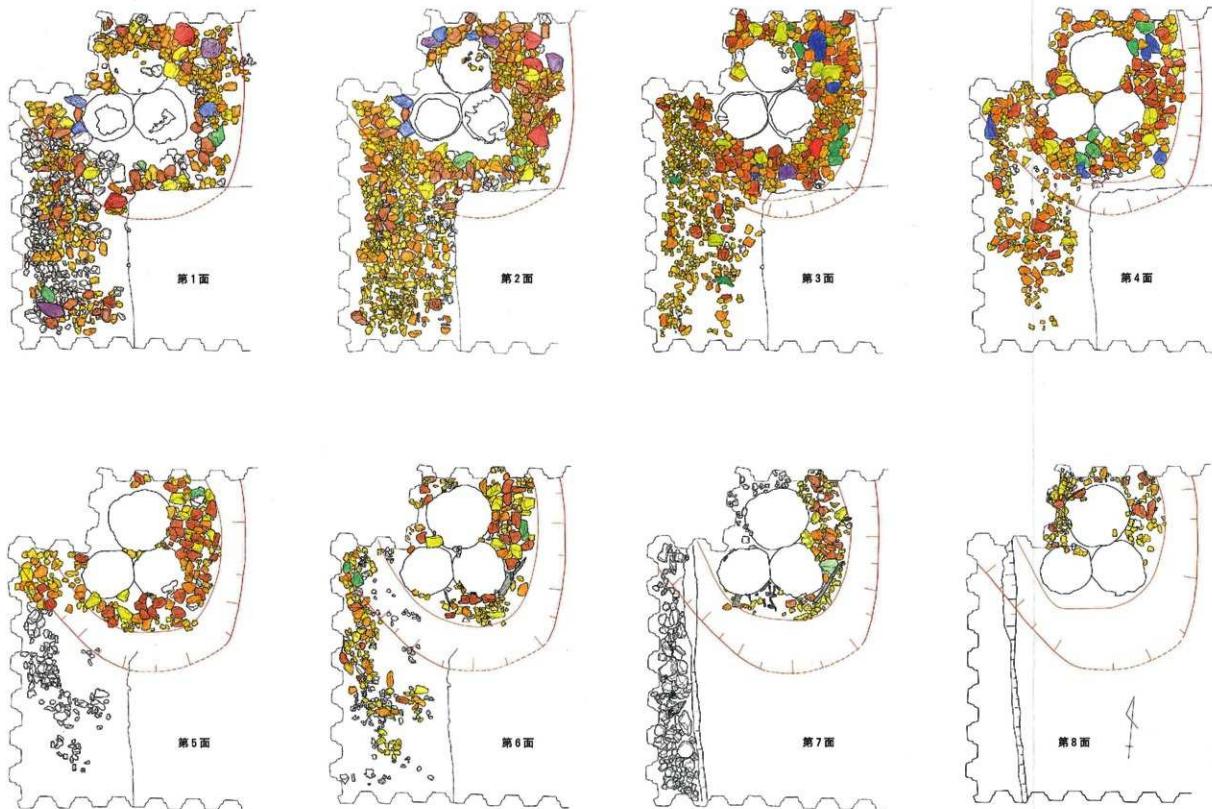
第8面

上面から約110cm掘り下げた段階で、標高は6.2m前後である。心御柱の柱材を取り上げ後の状況である。

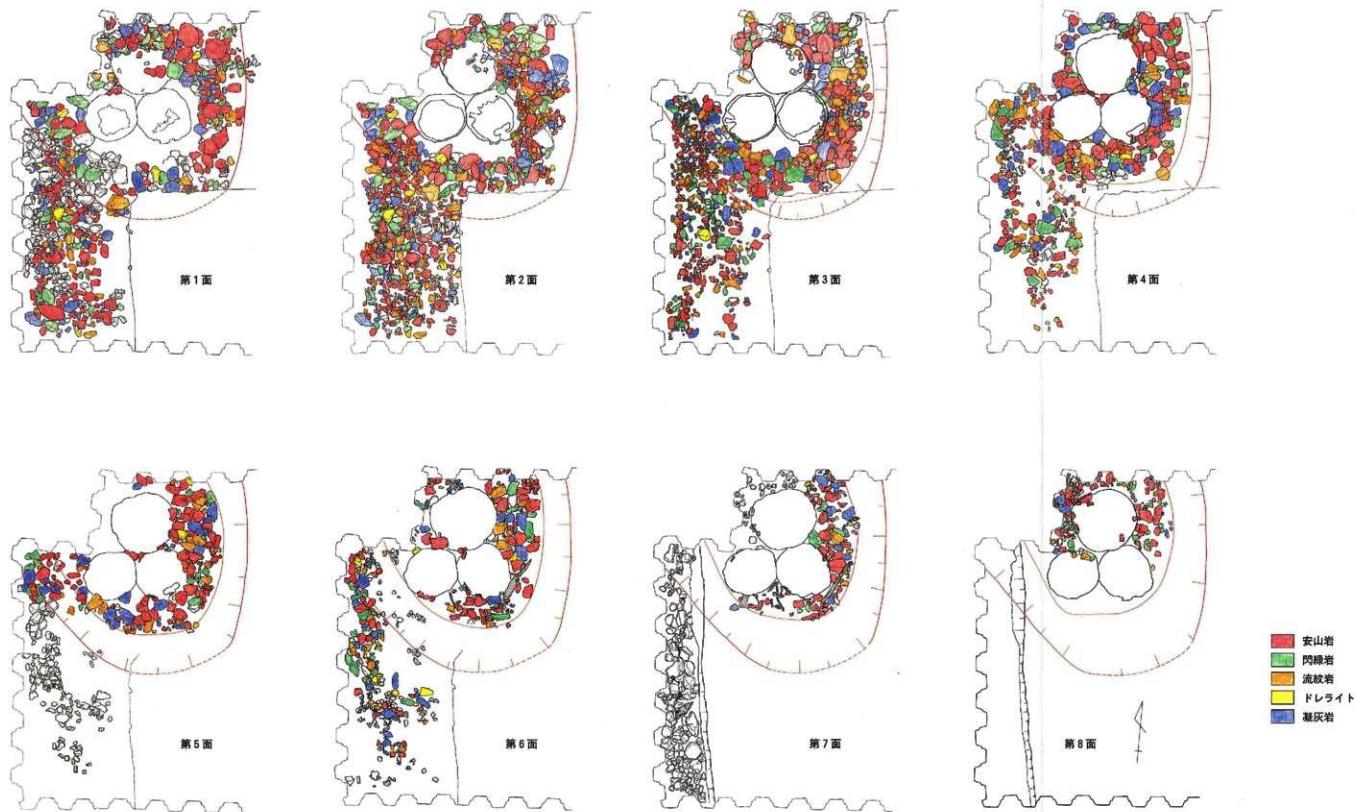
石材・重量は、第7面と変わらない。



第30図 八足門前調査区 心御柱平面図 (S = 1/80)



第81図 八足門前調査区 心御柱平面図（礫重量分類図）（S=1/80）



第82図 八足門前調査区 心御柱平面図（礫石材分類図）(S=1/80)



写真117 八足門前調査区 心御柱 出土状況(1)
(北東から)



写真118 八足門前調査区 心御柱 出土状況(2)
(南から)



写真119 八足門前調査区 心御柱 出土状況(3)
(南東から)



写真120 八足門前調査区 心御柱 出土状況(4)
(南西から)

写真121 八足門前調査区
心御柱
南西柱材取り上げ後（南西から）



写真122 八足門前調査区
心御柱
南西・南東柱材取り上げ後（南
から）



写真123 八足門前調査区
心御柱
柱材取り上げ後（南東から）





（南西柱材直下板材：南西から）



（底面出土木材：上面から）



（底面出土木材：南西から）



（完掘状況：南西から）

写真124 八足門前調査区 心御柱 柱穴底面の状況

5. 遺構の切り合いについて

心御柱の柱穴が構築される以前に遺構が切り合っていることが確認された。それぞれの遺構について概要を述べる。

第83図で示した模式図の数字は、1段階→2段階→3段階と切り合いの古い順番を示している。この模式図のなかで3段階が心御柱の柱穴にあたる。

1段階の遺構（第77図・写真125）

調査区西側で確認された遺構である。第7面で遺構の上端を確認した。矢板で区切られていて、遺構の一部分しか確認していない。検出した遺構は、南北5.8m分の溝状の遺構である。検出面上端幅で1.1mを測る。深さは、最大で0.8mであるが、溝の傾斜から調査区においてさらに深くなる可能性がある。溝内の覆土は、50cm～10cmの角礫もしくは亜円礫のみで充填されていた。

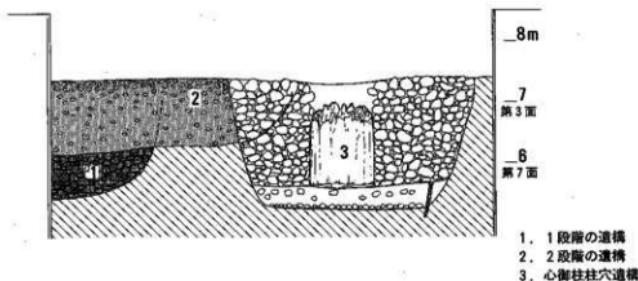
年代を特定できる遺物は出土していない。また遺構の性格についても不明である。しかし、

遺構の切り合い関係から、心御柱柱穴構築以前の遺構であること、また礫のみを充填するなど巨大木殿遺構と似通った点があることから、今回出土した巨大木殿遺構以前の本殿建設に關係する遺構である可能性を指摘しておきたい。

2段階の遺構

心御柱上面においてすでに検出していたが、土質・礫の出土状況も心御柱柱穴の礫と同様であり、調査開始当初は、同一の遺構と考えていた遺構である。

しかしながら、柱穴を掘り下げていくにしたがって、心御柱の充填された礫とは区別できることが判明した。この遺構は、第1段階の遺構を完全に覆う状態で堆積している。角礫および亜円礫を多量に含んでいるが、礫のみで充填されているわけではなく、青灰色粘質土に茶褐色土が混入する土が主体である。遺構についての性格は不明である。調査区内で確認できるのは、南西部分南北3.5m東西2.5m、深さ最大1.2mほどである。この遺構にともなう遺物は出土していない。



第83図 八足門前調査区 心御柱 遺構の切り合い関係 (S=1/80)



(検出状況：南から)



(検出状況：南から)



(半截状況：北から)



(完掘状況：北から)

写真125 八足門前調査区 心御柱柱穴西側の溝状遺構（1段階）

6. 柱の構造

南東柱材（第84図・写真126～132）

樹種は杉材である。直径は、最大径が125cmであり、年輪は168本確認できる。残存長は、140cmであり、上端の標高値は7.06m、下端の標高値は5.66mである。

柱の上端は、常時水位面よりも上に位置していたようであり、腐食している。よって柱上面が人為的に切られたのか、転倒などによって折れたのかは、柱の観察からは不明である。

柱の側面には、えつり穴があけられていたようであり、柱南側面には、下端から10cmに上下幅22cm、また北東側面には下端から46cmに上下幅30cmほどの場所に穴があけられている。南東柱材は、宇豆柱南柱材や、心御柱北柱材でみられるような、左右対称的な高さに穴があけられておらず、上下幅で20cmほどの違いがみられる。

側面には宇豆柱でみられた加工痕はみられない。

北柱材（第85図・写真133～138）

樹種は杉材である。直径は、最大径が140cmであり、年輪は105本確認できる。残存長は、118cmであり、上端の標高値は7.06m、下端の標高値は5.78mである。

柱の上端は、南東柱材と同様に腐食している。

よって柱上面が人為的に切られたのか、転倒などによって折れたのかは、柱の観察からは不明である。

柱の側面には、えつりの穴があけられていたようである。上面が腐食しているため、穴の上下幅は不明であるが、柱西、北東側面の柱下端から90cmの場所に穴があけられていたようである。

南西柱材（第86図・写真139～144）

樹種は杉材である。直径は、最大径が123cmであり、年輪は144本確認できる。残存長は、82cmであり、上端の標高値は7.03m、下端の標高値は6.21mである。

柱の上端は、腐食している。よって柱上面が人為的に切られたのか、転倒などによって折れたのかは、柱の観察からは不明である。

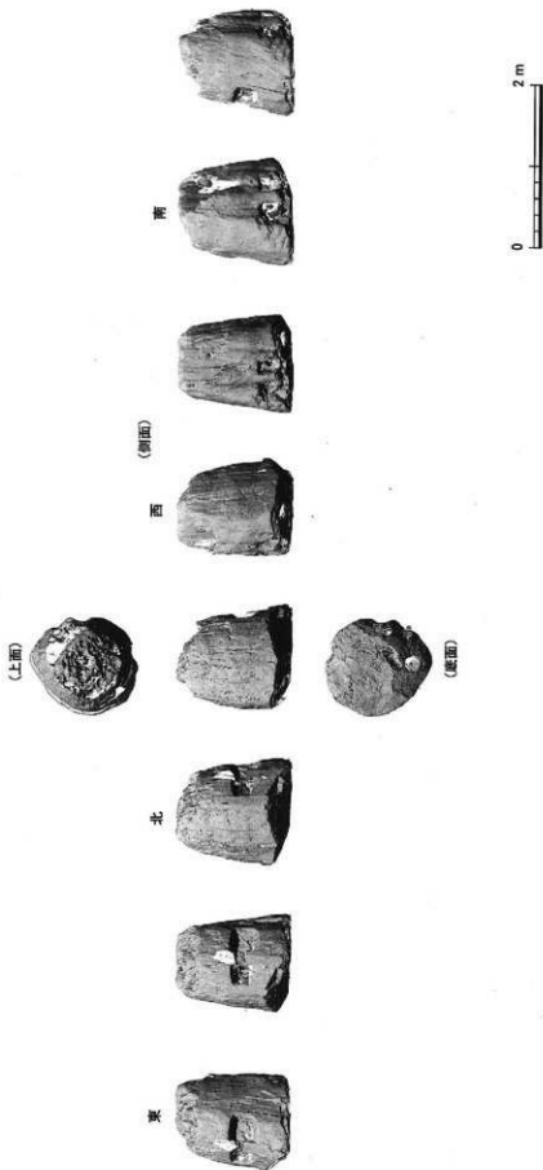
柱の側面には、えつりの穴があけられていたようであり、柱東側面下端から約28cmの場所上下幅20cmの穴があけられている。また、北西側面下端から約78cmの場所にも穴があけられていたと考えられるくぼみが確認できる。上端が腐食しているため、はっきりとわからないが、これもえつり穴の一部であろうか。

また、柱側面のはっきりとした加工痕は確認できないが、底面のエッジを切り落とした加工痕は確認できる。

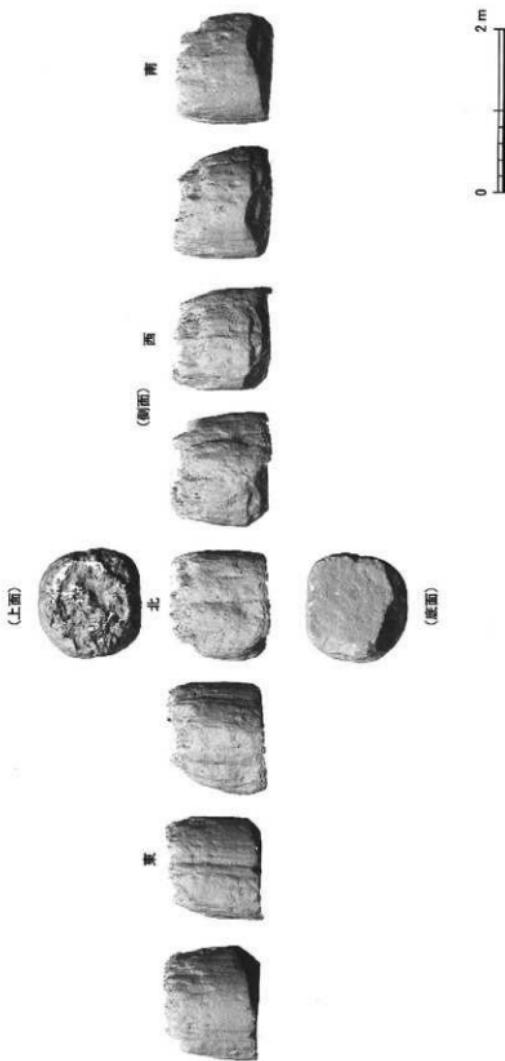
表20 八足門前調査区 心御柱基本データ

		樹種	直径 (m)	年輪 (本)	残存長 (m)	上端 (標高値: m)	下端 (標高値: m)	備考
心御柱	南東柱材	杉	1.25	168	1.4	7.06	5.66	
心御柱	北柱材	杉	1.4	105	1.18	7.06	5.78	
心御柱	南西柱材	杉	1.23	144	0.82	7.03	6.21	

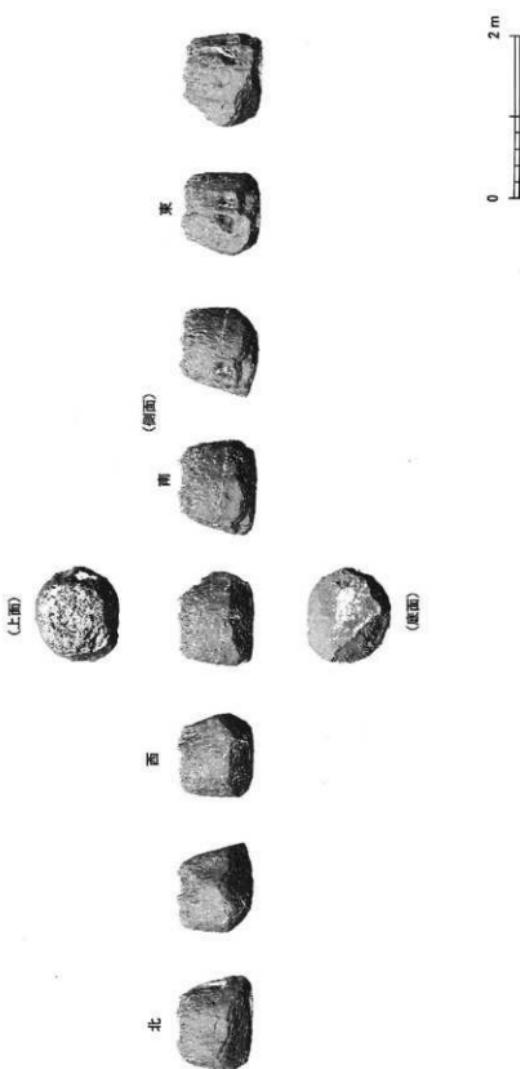
*樹種については、奈良文化財研究所光谷拓実氏の観察による。



第84図 八足門前調査区 心御柱（南東柱材） 3次元計測図（S=1/60）



第85図 八足門前調査区 心柱柱（北柱材） 3次元計測図 ($S=1/60$)



第86図 八足門前調査区 心柱 (南西柱材) 3次元計測図 (S=1/50)



写真126 八足門前調査区 心御柱 南東柱材
(側面 1)



写真127 八足門前調査区 心御柱 南東柱材
(側面 2)



写真128 八足門前調査区 心御柱 南東柱材（上面）



写真129 八足門前調査区 心御柱 南東柱材（底面）

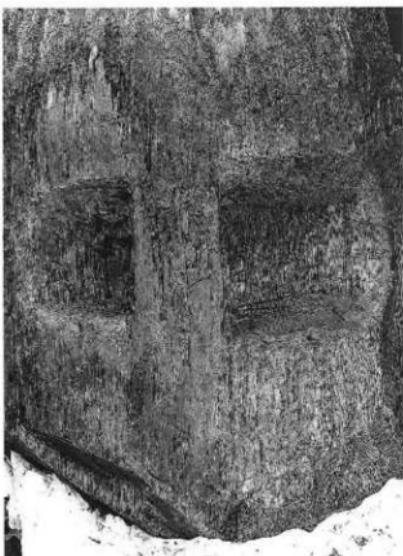


写真130 八足門前調査区 心御柱 南東柱材（えつり穴・西側）



写真131 八足門前調査区 心御柱 南東柱材（えつり穴・南東側）



(北東側)



(北西側)



(南側)

写真132 八足門前調査区 心御柱 南東柱材（底面加工痕）



写真133 八足門前調査区 心御柱 北柱材
(側面 1)



写真134 八足門前調査区 心御柱 北柱材
(側面 2)



写真135 八足門前調査区 心御柱 北柱材
(側面 3)



写真136 八足門前調査区 心御柱 北柱材（底面加工痕）



写真137 八足門前調査区 心御柱 北柱材（上面）



写真138 八足門前調査区 心御柱 北柱材（底面）



写真139 八足門前調査区 心御柱 南西柱材
(側面1)



写真140 八足門前調査区 心御柱 南西柱材
(側面2)

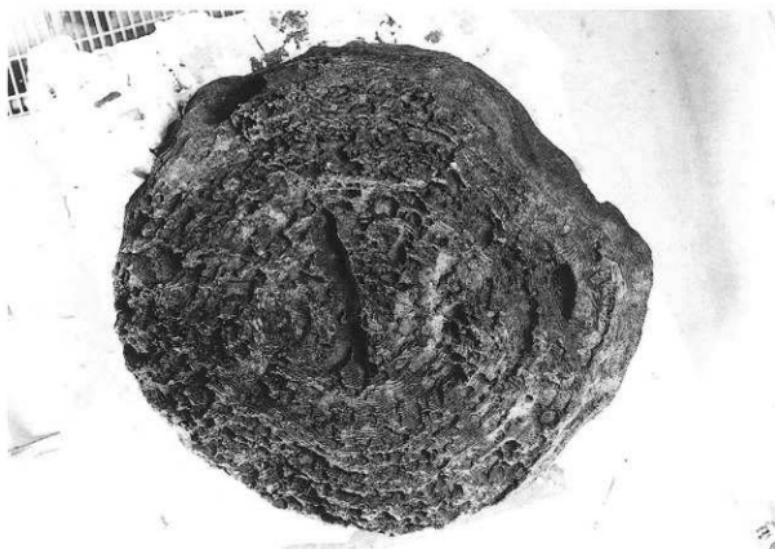


写真141 八足門前調査区 心御柱 南西柱材（上面）

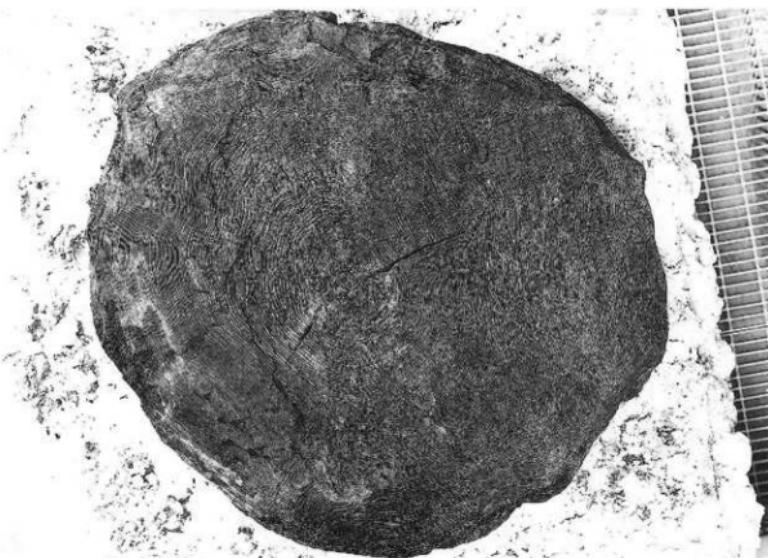


写真142 八足門前調査区 心御柱 南西柱材（底面）



写真143 八足門前調査区 心御柱 南西柱材（底面加工痕 1）

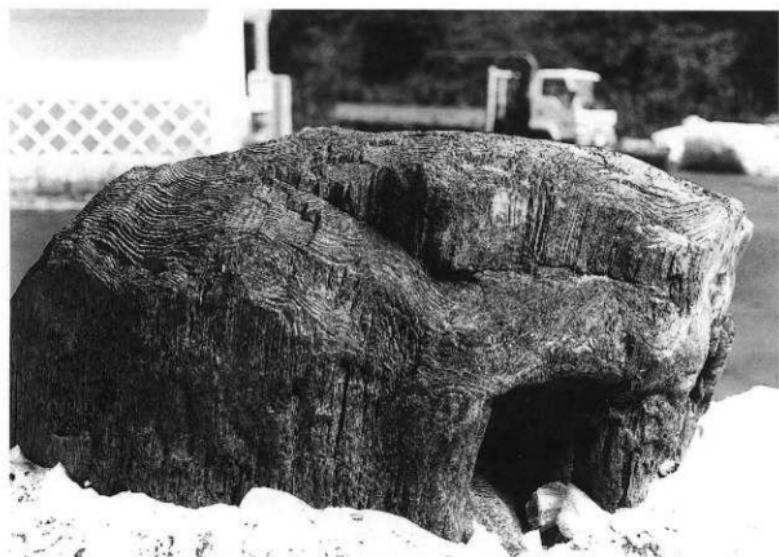


写真144 八足門前調査区 心御柱 南西柱材（底面加工痕 2）